

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p><長期目標></p> <p>リンポポ州ベンベ郡における HIV 陽性者及びエイズに影響を受けている人々が心身ともに健康を維持することができ、HIV/エイズに対する差別・偏見が軽減され、HIV 感染拡大が抑えられる。</p> <p><プロジェクト目標></p> <p>リンポポ州ベンベ郡マカド地区 9 村において、HIV 陽性者が健康を維持していくためのサポート体制が向上するとともに、HIV 陽性者を含む地域住民が効果的な HIV 感染拡大予防活動に取り組むことができるようになる。</p>
(2) 事業内容	<p>(イ) 地域で患者をケアする在宅介護ボランティア (Home Based Care Volunteer、以下 HBCV) の育成</p> <p>①HBCV の能力向上のための研修 (HIV/エイズ治療に関する研修、救急法研修、カウンセリング法研修)、②他村、他 NGO の経験から学ぶための経験交流の実施 ※本活動二年目より新規事業実施団体を模索し、協働していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リサーチ期間を経て、2014 年 4 月より新規事業提携団体「チルンザナニ・ホームベースド・ケア」(以下チルンザナニ) と協同を開始した。 ● 4、9 月にチルンザナニの在宅介護訪問に同行した。 ● 9 月に 4 日間をかけてワークショップを実施し、活動計画を策定した。 ● 9 月 29 日～10 月 1 日に、救急法研修を実施。チルンザナニ HBCV19 名、スタッフ 3 名が参加した。(①) ● 専門家派遣の一環として、エイズ治療薬へのアクセスに対するアドボカシーに取り組んだ経験のある林達夫医師を招聘し、事業地を訪問すると同時に HIV/エイズ関連の活動をする NGO、機関を訪問した (10 月 11～24 日)。 <p>(ロ) ケアの必要な子どもの世話をするボランティア (Drop In Center Volunteer/Early Child Development Volunteer、以下 DICV/ECDV) の育成</p> <p>①DIC ボランティアの能力向上のための研修 (イと同様)、②子ども同士の経験交流、③子どものケアセンター (DIC) に対する、楽器や本などの教材提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 一年次に実施したカウンセリング研修のフォローアップとしてとくにコミュニケーションに焦点を当てた研修を実施 (11 月 3～7 日)。DICV17 名が参加した。(①) ● 8 月 13～15 日、子ども虐待の見分け方・対応方法についての研修を実施。DICV17 名が参加した。(①) ● DIC が実施する統計会合に毎月 JVC が参加し、子どもへのケア状況の共有や、研修の振り返りなどを行った。(①) ● 子ども同士の経験交流を 2013 年 11 月 29 日、2014 年 10 月 10 日に実施した。それぞれ約 150 名、約 120 名の子どもが参加した。また、9 月 1～2 日にはアート活動の日を開催した。(②) ● DIC に伝統的楽器、スポーツ用品、文具などを寄贈した。(③) ● 子どもの世帯調査を一年次から継続し (4 月、7 月)、74 名を訪問した。

- 一カ村の DIC において、DICV 主導で初めて保護者会が開催され、41 名の保護者が参加した (9 月 19 日)。
- 5 月 12~13 日に、3 つのセンターの DICV がお互いの活動を訪問する交換訪問を実施した。

(ハ) HBCV および DICV による予防啓発活動の強化

(イ) (ロ) の研修成果を生かし、予防啓発を実施する。

- HBCV (前事業提携団体 LMCC) は 1 年目の研修成果を生かし、日々の訪問介護の中で予防軽活を実施していることがモニタリングの結果確認された。とくに母子感染予防に力を入れている。
- チルンザナニが拠点とする公立診療所と協力し、HIV 啓発キャンペーンを実施した (8 月 20 日)。約 30 名が HIV テストを受けた。
- DICV が中心となり、クリニックの協力のもと、自らのコミュニティ内で HIV 予防啓発キャンペーンを実施 (6 月 26 日、7 月 11、23)。約 90 名が HIV テストを受けた。
- 一カ村で、DICV が学校に招かれ HIV について授業を持った (8 月 1 日)。

(ニ) HIV 陽性者自身によるケアの質の向上と予防啓発活動の促進

① HIV 陽性者が自身をケアできるようになるための研修、② 経験交流、④ 予防啓発活動の促進

- 本活動は新規事業提携団体と開始する予定のため、今期においては主だった活動はなかった。しかし、(ホ) にあるように菜園活動に関心をもった SG メンバーのアプローチにより、研修が実現。その後、専門家訪問時に JVC が SG ミーティングに参加するなど関係構築を図った。

(ホ) 生活改善のための家庭菜園づくり

① 家庭菜園づくり研修、② 技術定着のためのモニタリング、③ 経験交流

- 菜園ファシリテーターによる菜園研修が 5~9 月にかけて 7 回行われ、ファシリテーター 6 名によって、36 名が研修を受けた。(①)
- 3 月 17~19、4 月 8~10 日の 2 回に分けて、DICV11 名を対象に家庭菜園研修を実施した。(①)
- チルンザナニの活動地域において、家庭菜園に関するワークショップを近隣住民 53 名 (HBCV22 名含む) 対象に開催 (6 月 25 日)。その後、7 月に 3 回の菜園研修を実施し、約 60 名が研修に参加した。(①)
- チルンザナニが拠点とする公立診療所の HIV 陽性者 SG メンバー 11 名を対象に菜園研修を実施した (9 月 17~18 日)。(①)
- 8 月 28 日、リンポポ州大学生理学部の協力のもと活動村の栄養実態調査を行った。この調査をもとに今後栄養研修を実施する予定。(①)
- 菜園トレーナー、ファシリテーターが一年を通して菜園活動のモニタリングを行った。(②)
- チルンザナニの HBCV とコミュニティメンバーが、LMCC における菜園活動を訪問した (10 月 15 日)。(③)
- 東ケープ州の JVC 以前の事業地より有機農業を実践する農民 3 名を事業地に招聘し経験交流を図った (6 月 17~26 日)。その間に実施された会合 2 回にそれぞれ地域住民 26 名 (20 日) と 23 (21 日) 名が参加した。(③)

	<ul style="list-style-type: none"> ● 東ケープ州の JVC 以前の事業地を本事業の対象者 7 名が訪問、経験交流を図った (11 月 15～23 日) (③)
(3) 達成された成果	<p>ここでは、総評のみを記載、「期待される成果とその指標 (申請書別紙 2)」の事業 2 年目の指標に対するコメントは、添付別紙を参照。</p> <p>(イ) HIV 陽性者やエイズの影響を受ける人びとが地域で適切にケアされるようになる。</p> <p>活動開始当初現地事業提携団体 LMCC については、一年次に実施した研修の成果が、日々の訪問介護活動に生かされていることが、二年目初旬の事業モニタリング、評価活動を通して確認された。しかし、提携関係を停止して以来モニタリングが困難なことからその後の成果は確認できていない。</p> <p>本事業二年次からの新規提携団体のチルンザナニについては、2014 年 4 月より協同を開始。菜園活動を先にはじめながら、訪問介護の活動についての理解を深めていき、活動計画の策定に着手したのが 9 月なため、現時点では活動成果を評価することは難しい。一方で、9 月に実施した救急法研修の飲みこみなどが早く、団体として地域との協力体制なども良好なことから、三年次の短い期間内でも一定の成果が上がるのが期待される。</p> <p>(ロ) エイズの影響を受ける子どもが地域で適切にケアされるようになる。</p> <p>様々な研修でケアに必要な知識を得てきたことから、DICV が自信をもって子どもたちのケアにあたれるようになった。困難を抱える子どもたちに日々対応する中で、他のボランティアとどのように情報共有しチームで問題解決に取り組むか、地域のステークホルダーとどのように協力するか、ボランティア自身がストレスをどのようにマネージするかなどを学び、実践に生かしている。</p> <p>一つの DIC では、今まで通ってくる子どもの中で HIV 陽性は 1 名と把握していたが、2014 年 10 月現在で 7 名であることが分かった。今まで自らのステータスを明かせなかった子どもたち、もしくは保護者が、DICV が地域内 (学校など) で HIV について話している姿を見て、HIV に関する知識を持っていることを知り、ステータスを明かしたことから、把握人数が増えた。HIV ステータスを明かすことは適切なケアを受けるための大事な一歩であり、今後が期待できる。</p> <p>(ハ) HBCV、DICV による予防啓発活動が強化される。</p> <p>一年次、HBCV、DICV とともに研修を経て、予防啓発活動を効果的に実施するにあたり必要となるエイズ治療の基礎的な知識を得ることができた。</p> <p>HBCV は日々の活動の中で保健局と連携し予防啓発キャンペーンなどを行っており、その際に学んだ知識を生かしている。日々の訪問介護の際にも予防啓発 (特に母子感染について) を以前より詳細で正確な情報提供を行いながら行っていることが確認できた。</p> <p>DICV は予防啓発キャンペーンを自ら企画し、各 3 村で 1 回ずつ実施した。また一村では学校の教員から声がかかり授業内で HIV について講義した。また、子どもたちから DICV に HIV などに関する情報を求めてくる事例も報告されており、着実に予防啓発の機会が増えている。</p> <p>(ニ) HIV 陽性者自身によるケアの質が向上するとともに HIV 陽性者自身が地域で予防啓発活動を実施できるようになる。</p> <p>当初事業実施提携団体 LMCC が運営する自助グループ (サポートグループ、SG) に所属する陽性者などを中心に研修を実施、ケアの質向上を図る予定だったが、提携団体が SG の運営を中断したことが分かったため、一年次は実施に至らなかった。チルンザナニとの活動はまだ初期段階で、二年次も SG に関する</p>

	<p>活動は実施に至らなかった。</p> <p>しかし、チルンザナニの拠点とする公立診療所に属する SG のリーダーから JVC が同地域で実施した菜園研修に関心を持ちアプローチがあったため、SG メンバーを対象にした菜園研修を実現した(2014 年 9 月)。これをきっかけに、SG ミーティングに JVC が参加し関係構築を図るなかで、2014 年 10 月時点で、男性をターゲットとした啓発活動を行ないたいという提案を受けた。三年目に着手できる見込み。</p> <p>(ホ) 家庭菜園によって栄養／生活状況が改善される。</p> <p>菜園ファシリテーターが中心となり地域内での家庭菜園研修を開始した。一方で、一年次からの研修生は水不足、家畜などに菜園を荒らされたなどの理由で継続できなかった者が多く、これらの課題を解決するためのトレーナーによるモニタリングも十分ではなかった。現時点で継続しているのは研修生 22 名のうち 7 名で、彼らの実施状況は良好である。</p> <p>一年次に育成した菜園ファシリテーターがそれぞれの地域住民を対象に研修を開始した。研修を実施した 6 名のファシリテーターのうち半数は改善を必要とするが、それぞれ今まで身につけた知識やスキルを使い地域住民に家庭菜園を広げることに意義を見出し、その後のモニタリングなども積極的に行っている。</p>
(4) 持続発展性	<p>(イ) 地域で患者をケアする在宅介護ボランティア (Home Based Care Volunteer、以下 HBCV) の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業提携団体の HBC 活動は今後も継続される。日々の訪問介護活動の中で知識、スキルが使われていくことでその成果が持続される。 ・ 南アフリカ政府の政策変更により、今まで NGO が運営する HBC が担ってきた訪問介護の役割の一部が、政府保健局の職員となるコミュニティ・ヘルス・ワーカー (CHW) に移行しつつある。CHW は既存の HBCV から選ばれることもあり、引き続き HBCV のスキル向上を図ることで地域内の医療、HIV ケアの質向上に寄与されることが期待される。 <p>(ロ) ケアの必要な子どもの世話をするボランティアの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業実施提携団体の DIC 活動は今後も継続される。日々の活動の中で知識、スキルが使われていくことで、成果が持続されていく。 ・ 研修の成果を定着させるためのレビュー、活動のモニタリング、他団体との経験交流などを積極的に行い、研修で得た知識・スキルの定着を図っている。 <p>(ハ) HBCV や DICV による予防啓発活動の強化(改善)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HBCV 日々の家庭訪問の中で、DICV は子どもたちとの活動の中で予防啓発活動を実施していく。 ・ 本事業二年次には DICV が啓発活動を自ら計画し実施した。また、DICV が HIV に関する知識に長けていることがコミュニティ内で知られ、学校や村長が主催する会議などに呼ばれ、啓発活動の機会が広がっている。本事業三年次では、地域の中で彼らの活動がより認知されるようサポートしていく。 <p>(ホ) 生活改善のための家庭菜園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 菜園作りの研修の実施、定着させるためのモニタリングを引き続き行っていく。とくに関心を示す住民には積極的に研修を提供し、その中で継続の

	<p>可能性がある者に焦点をおいてフォローアップを行っていく。菜園活動については聞くことより実践から学ぶことが多い。可能性がある者に重点を置くことで、地域内でモデルとなりうる菜園を増やし、その後の普及の土台を残していくことに本事業三年次は注力する。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 本事業二年次には、菜園ファシリテーターが自ら企画し、近隣住民に菜園研修を提供しはじめた。現在は JVC が実施のサポートをしているが、自ら継続していけるよう、教え方の技術の向上・定着を図っていく。
--	---